

愛の讃歌

塚元寛一

はじめに

めんたまのない さかなのことをかんがえていると

この じだいのことが ちよつぱり わかつたきとする

僕等には記憶がある。それはいつも忘れられないところで引つ掛かって、誰の眼にいつでも触れられる種類のものではなく、がらんとした天井に貼りついたポスターや、蜘蛛の巣のように、深夜の闇の中でおそるおそる僕だけを覗きこむ。そうして諦めたように、空想の終結がおとずれて、しらずしらず僕はまた欲望の傀儡になる。おおくはそれが仮面であると知っているのだが、きまつたように影が浮かび上がってきて、僕を精神世界へつれこみ、かと思えば僕をうしろめたい奈落の底へと突き落とす。その匂いがやけに沁みてくるとき、僕は窓の方へと眼をむけ、かたくなに拒みつづけた悪い暗示を受け容れる。そうして僕はもう咳と骨だけになる。もうとりたてて快い感傷の発見はない。たとえるのなら、道端にすてられた手袋の形象の下に、エピソードのみが残っているとでもいうべきだろうか。ああ、僕等の記憶は最初なものも欲しはしなかったのに、いまはそのものを、いまはそれだけを、ああ、刈取ることに真面目そうな顔つきをする。根暗で、意味深で、また人生とはかくも驚くべき哲学を持っている。僕等には記憶がある。そして、おお、僕には避けがたい人生というものが、かつてないほど、ふかい雪の底にだけ射す月のひかりのように思われる。そしてそれ故に、僕の瞳はなが靴でありたいと思う。僕は眉をひそめ、眼をつむり、歩るくだろう。おおくの葬り去られた歴史のために。

目次

はじめに	3
愛の讃歌	6
ゆううつな食卓	30
いま あぶなっかしい	33
うまれてきてよかった ～スピリチュアル・ヒーリング～	38
お母さんは家から出て行った ～屈折少年の一部始終～	58
あしの妄想	61
懐古	71
勇気をだして	74
由来	79
指	84
絶望の崖をのぼろうとする蜘蛛	87
田舎	90
脚が腐ってゆく	93
とうめいな落日	96
小悪魔	99
地平線にしずむ太陽	102
七夕まつり	105
死の灰	108
鏡 ～カーテンと月明かり～	127
逢いたくて	134
永遠の火	137
名	140

愛の讃歌

耳にてはかるに
女は夢見る少女

——はげしく心ゆさぶってほしい

うたがうことも知らず癡に咲くほど

いたましき

貪婪きわまる身も暢やかに

いま、あなたへの誓いのことは……

わたしがもし歌手だったとしたのなら

マイクスタンドのまえではばたきをしてみせるわ

そしてあなたという鳥かごで

毛づくろいをしているわたしを見て——
愛しているの

——そう 愛しているの

何度こうやって胸のうちに呟いてみたことでしょう

出逢う前からずっと そう ずっと

あなたを探し求めていた気がするの

ねえ だから人生って素敵だとわたしには思えるの

だって それは何なのって問い掛けてみた瞬間に

あなたの顔がふっと甦生るから——

鏡にむかって

またやってくるどこしへの空

あおみがかった灰の太息が

ほんとうにはてしないほどひろがっていつて
するっと視点をもどした瞬間に
いつも帯紐のようにしめつけられる

だから余命一日と宣告されてもわたしは
気丈に振る舞っていられる

だってあなたが傍にいて励ましてくれるんですもの
ああ、いつもくちびる——唾液^{だえき}だらしなく
こぼれていくほどの

官能^{かんのう}あまく感じさせて……

だから きつと 金糸雀^{キナリブ}も

ナイチンゲールもみずからはじらいをみせるわたしの声

神でさえもおもわず聞き惚れる天上の楽音

その詩福^{しふく}を——あなたに ささげる

だから言ってみて！

——そう 言ってみて

あの点描画のように精緻の星空だって

あまくみごとに熟れてゆく 蜜柑^{みつ}だって あなたの眼のまえで

こころゆくまでおどらせてみせる

あなたのように無邪気に澄んだ瞳のあおぞらだって

地球儀のようにいきおいよく廻^{まわ}転^わしてみせる

あなたがわたしを凝視^{けいし}めてさえいてくれれば……

しろい花にそおつと

いろあざやかな蝶がとまる

そのせいなのか——そのせいではないのか

胸がちくりといたむ

なんて迂愚おろかでこっけいな花

あなたへの想いがあふれすぎて
いまとなつては蟲まじぶかく 遣る瀬無いほどさかしまに
酒や 阿片あへんや 麝香じやくかうさながらに
けれど あなたの体臭たいくさうが 胸むねが たましいのかをりが
とほくとほくおよばない
わすれかけた渴望かわきをおもいださせる

おおきめの鍋になみなみと
牛乳ぎゅうにゅうがそそがれ 沸騰あげられ—— 助けてください
ヘルフ・マイ・フリース
助けてください！

どんなえがたい栄光も 徳も
あんたに優まさるものはない！

だれだって口先くちさきでものを言う 恥はずかしげもなく
みじめつたらしく、また 相手に点数てんすうをつけて幻滅げんめつ

おねがいよ、DARLING——
そんな都合ごごのいい人たちのお遊戯あそびにだまされないで
わたしはあなたの血 たとえるのなら あなたの小酒盞せうしゆざん
そうよ もっと
わたしをワインで酔よわせて

骨ほねに沁しみみ込むほど、DARLING——
割れたガラスの影かげ
が みうごきできないように 一羽ひとの鴉からがその夜のなかで
ぬるみながら ひやつこくなりながら そう ぬくみながら
どんなふしぎな言葉をささやいてみせるでしょう
ホット・カイロ・オヴ・ドリックス・ドゥ・ユー・ハウ
——どんな飲み物があるのかしら

発情期のついでにしまった豚たちは

欲望をこころゆくまで勘違いすることでしょう

そう 人びとは ただ 安心する材料がほしいだけ……

ただ だれかと同じであることに

下衆な ものほしげな どうしようもない心を充たすだけ

そんなくだらない人間にわたしの気持ちなどわかってほしくない

ここからそうおもうの——

おのれの可哀さを覗きこむ勇気もなくそつたれ共

そんな不細工な連中に あなたが取り込まれてしまわないか心配です

あなたは わたしにとってほんとうに特別なひと

掛け替えのない 生きている燈火をともしてくれるひと

あなたがいなければ！

どんなにわたしの人生はつまらなかったことでしょう——

罪業のこのうえなき深淵で

わたしはあなたに巡り合った

だから わたしはわたしのことばに責任を持つとうと思います

あなたに出逢うまで わたしは恐くてたまりませんでした

じぶんのことばに自信が持てなかったのです

——でもいまは素直にこころをつたえられる

しずかにうごく浄ら

なほたりなくなる歎聲

あなたの唐辛子のようにしげきてきな眞赤なくちびる

まるで嘘のつけない空のうつりかわり

あなたは屈託ないほほえみをうかべている

ただそれだけでいいの……

……ただ それだけで！

そこにあなたのやさしい手が添えられていたのなら

ああ あたし

まどろみのなかへ

ふかくふかくしずんでゆく

わたしはなにもかもを棄てることができる

どうしてだいたと いたずらに問い掛けたいあなたが思い浮かぶわ

そうやっておからかいになれるのね

ああ ひめられた蜜のうみで

わなわなとやわらかくひらいていく蓮の花のなかで

わたしといういつびきの蜘蛛が劇におぼれている

——だれもが登場人物

つかのまの立場を背負わされて

それでもいつしかほんとうの自分自身をみつける

きつとわかるはずよ、そうよ、わかるはず……

吹雪きでさえも聖者の行進のようにみえ

嵐のただ中でも天使が降りたかのような

画家のインスピレーション

土砂崩れもあたたかい大地の涙のようにみえ

ふしぎな残像というものが

歎賞の声をあげている

おお、なんの——

なんのてひどい髪々にいいくるめられることがあるでしょう

あらゆるものが恍惚とろけていくのをしつたとき
骨抜きほねぬにされることも 腑抜けふぬの態ていになつてしまうことも

いまでは ちつとも抵抗がない

自分自身を微塵こにうち砕く

烈こしい存在へのあこがれが

句点コンマのごとく

そう 蟻のごとく

彫針のごとく

あたしの足もとからのぼつてゆく

——あなたの甘美なほほ笑みのまえで

秘密がほとばしむ礮いとうんちやく巾着の想いにゆらゆらとゆられて

わたしはこころの眼を感じるでしょう

そして神の声に耳をかたむける

それがこそばゆくあたしの髪にふれ

耳にゆがんだ吐息が——沙漠のこえのように

ゆつくりと吹きぬけてゆく

だれもが旅びと！ なぜ、なぜ、と、うなだれながら、

時間をわすれた

かなしみが襲った——

墓場リバが 労働者リバが 河リバが ゆたかな自然あふれる森が

大陸の亀裂リバが 宇宙の頭脳リバが 鼓動する心臓リバが

いくさのなかでも尽きることない歌リバが ブラックジョークリバが

いとおいしい歓喜リバが

霊リバによつて解き明かされるべき神秘の運動リバが

わたしたちのそばで鳴り響いている……

ああ だから うたえる の うたえる の
よ あなた ! 運命よ わたし は あなたの ものでは ない

だれ が それを 決めた という の
お お だれ が 神さま の おくりもの だと
わたし は あこがれ と
なまみ の からだ あず けて ——

—— あなた と の つよい 結びつき を 感じる
も っ と よ そう も っ と

も っ と つよ く
こ ころ を ゆさぶつ て ほし い
あ な た へ の と き め き で

わたし は 納屋^{なや}や

水車や舟のところへゆく
も じ や も じ や し た 印 象 の し わ が れ 声 の と ころ へ ゆ く
あ な た へ の 愛 を さ が し て わ た し は 旅 立 つ
求 め る で も な く —— さ そ わ れ る で も な く
雪の瓦のように ひと日がふりまいていった

静謐^{せいひつ}のうちへゆく
そう わ た し は 雲 へ
ぬ れ か え っ た 野 末^{のすえ} の と ころ へ ゆ く

わたしは永遠のいのちのところへとゆく
やがて潮のかおりが燻^くずぶる
澄みわたる空想の
はなやかな そう はなやかな夢のところへゆく